

Rosenbergの自尊心尺度の再検討

著者	田中 道弘
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	6
ページ	135-139
発行年	2006-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000873/



Rosenbergの自尊心尺度の再検討

Reexamination of a Self-esteem Scale of Rosenberg.

田 中 道 弘

TANAKA, Michihiro

本研究では、Rosenbergの自尊心尺度の再検討^{※1}として、まず①自尊心尺度の項目で低得点群に分類される向上心群は、他の自尊心低群（自己嫌悪群）と異質とみなせるかどうかを確認し、さらに②向上心群は、Rosenbergの想定した自尊心概念に沿っているものであるかどうかを確認することを目的とした。調査協力者は、大学生400名（男性145名、女性255名）、年齢は18歳から26歳の男女（平均年齢 男性：19.7歳 女性：19.6歳）であった。分析の結果、自尊心項目において“自尊心低得点群”に分類される調査協力者のうち、“向上心群”と“自己嫌悪群”では、同じ自尊心低得点群にも関わらず、両者は異質の群である可能性が高いことが確認された。自尊心尺度の項目で低得点群に分類される向上心群が、Rosenbergの設定した自尊心概念に沿ったものであるかどうかを検討した結果では、Rosenbergの第8項目での向上心群は、Rosenbergの想定した自尊心概念に沿わない可能性が示された。

問 題

Rosenberg (1965) の自尊心尺度 (self-esteem scale) は、「自己に対する肯定的、あるいは否定的な態度」と定義されている。近年、この自尊心尺度で使用されている項目に、別の水準の要因が入り込んでいる可能性が指摘されている。

溝上 (1997) は、“私はいろいろ不満や反省がないわけではないが、基本的には今のままの自分でいいと思っています”という自己評価センテンスを調査協力者に与え、その回答結果をもとにYES群（質問に“はい”と回答）とNO群（質問に“いいえ”と回答）に分類し、Rosenbergの自尊心尺度とWHY答法による規

定因からその関連を調査した。その結果、NO群（今のままでは良くないと思っている者）のうち、自尊心が高かった調査協力者に「自己を否定的に評価しながらも、可能性に向かって追求していくという肯定的な志向を内包している」ことを見出している。

田中 (1999) は、Rosenbergの自尊心尺度 (星野, 1970) に対する回答理由の研究を行った結果、第1項目“私はすべての点で自分に満足している”と第8項目“もう少し自分を尊敬できたならばと思う”の否定的（自尊心得点が低く見積られる）選択肢を選択している調査協力者の中に、“現状に満足してしまったら今後の成長が望めない”などという非常に前向きな回答理由を確認している。田

キーワード：自尊心、向上心、自己嫌悪、ローゼンバーク
Key words : self-esteem, kojo-shin, self-disgust, Rosenberg

中は、このような回答理由を「向上心」ととらえ、後の研究でも同様の傾向があることを示した（田中，2000a）。また、第7項目“私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値がある人だと思う”や第8項目“もう少し自分を尊敬できたならばと思う”^{注2}には、自尊心を捉えているのかどうか疑問に思えるような回答理由も確認されている（田中，1999）。

さらに田中（2002a）では、自己評価高群と、自己評価低群の中に自己嫌悪群と向上心群を分類し検討を行っている^{注3}。これら3群のうち自己評価高群は、項目1“私はすべての点で自分に満足している”では、「よくあてはまる」、「あてはまる」という回答が該当する。自己評価低群は、項目1に、「まったくあてはまらない」、「あてはまらない」、のいずれかを選択した群であり、このうち自己嫌悪群は「あてはまらない」理由が「自分が嫌いだから・自分に自信がないから」であり、向上心群は「現状に満足していたら、今後の成長が望めないから」という回答理由を示した群である。しかしこれまでの研究では、自尊心尺度の項目で低得点群に分類される向上心群は、他の自尊心低群（自己嫌悪群）と異質とみなしてよいかどうかについては、十分な検討が行われていない。項目1“私はすべての点で自分に満足している”と項目8“もう少し自分を尊敬できたならばと思う”について（それぞれ4段階評定）、自己嫌悪群、向上心群との平均得点の間に有意差が確認されなければ、両者は異質であると判断できず、概念上Rosenbergの自尊心の定義に沿ったものであるということになる。

また、向上心群と自己嫌悪群との自尊心得点の平均得点の間に有意差があったとしても、

向上心群の中で「よくあてはまる（まったくあてはまらない）」を選択した群と「あてはまる（あてはまらない）」を選択した群との自尊心得点の各平均得点を比較した場合、想定される全体の自尊心得点に有意差があった場合、実はRosenbergの設定した自尊心概念に沿っていることになる。つまり、項目1“私はすべての点で自分に満足している”では「まったくあてはまらない」という選択肢を選んだ群の方が、「あてはまらない」という選択肢を選んだ群よりも自尊心得点が低ければ、項目1は自尊心を測定する項目として機能していることになる。

目 的

そこで本研究では、まず①自尊心尺度の項目で低得点群に分類される向上心群は、他の自尊心低群（自己嫌悪群）と異質とみなせるかどうかを確認し、さらに②自尊心尺度の項目で低得点群に分類される向上心群は、Rosenbergの設定した自尊心概念に沿っているものであるかどうかを確認することを目的とした。

方 法

調査協力者：茨城県内の大学生400名、男性145名、女性255名

年齢：18歳から26歳（平均年齢 男性：19.7歳 女性：19.6歳）

実施時期：1999年12月中旬から2000年1月下旬。このデータは田中（2000b）を使用した。

使用した尺度と項目：Rosenberg自尊心尺度 星野（1970）版（4段階評定）。得点範囲10点～40点。項目1“私はすべての点で自分に満足している”および項目8“もう少し自分を尊敬できたならばと思う”に対する回答理

由は、田中（2000a）を使用した。項目1での否定的な回答である「あてはまらない」か「まったくあてはまらない」と回答した理由には、“①今の自分が嫌いだから・自分に自信がないから”、“②自分のやりたいことが見つからないから、充実していないから”、“③現状に、満足してしまったら、今後の成長が望めないから”の中から最もあてはまるものを一つ調査協力者に選択させた。調査協力者が①か②を選択すれば自己嫌悪群、③を選択すれば向上心群とした。

項目8 “もう少し自分を尊敬できたならばと思う”での否定的な回答である「よくあてはまる」か「あてはまる」と回答した理由には、“①今の自分が嫌いだから、自分に自信がないから”、“②自分のやりたいことが見つからないから、充実していないから”、“③自分を尊敬してしまったら、今後の成長が止まってしまうから”の中から最もあてはまるものを一つ調査協力者に選択させた。調査協力者が①か②を選択すれば自己嫌悪群、③を選択すれば向上心群とした。

結 果

Rosenbergの自尊心尺度の平均値は23.27点 (SD=4.64) であり、尺度の信頼性は $\alpha = .799$ であった。項目1 “私はすべての点で自分に満足している”での否定的な回答である「あてはまらない」か「まったくあてはまらない」と回答した者は400人中336人いた。このうち回答理由①か②を選択した自己嫌悪群は197名、回答理由③を選択した向上心群は139名であった。自己嫌悪群の自尊心得点の平均得点は22.15点 (SD=3.85) であり、向上心群の自尊心得点の平均得点は24.83点 (SD=3.80) であった。t検定の結果、自己嫌悪群と向上

心群の平均得点の間に有意差が示された（両側検定： $t(334) = 6.30, p < .001$ ）。

項目8 “もう少し自分を尊敬できたならばと思う”での否定的な回答である「よくあてはまる」か「あてはまる」と回答した者は400人中303人いた。このうち回答理由①か②を選択した自己嫌悪群は222名、回答理由③を選択した向上心群は81名であった。自己嫌悪群の自尊心得点の平均得点は22.30点 (SD=3.86) であり、向上心群の自尊心得点の平均得点は25.31点 (SD=3.80) であった。t検定の結果、自己嫌悪群と向上心群の平均得点の間に有意差が示された（両側検定： $t(301) = 6.03, p < .001$ ）。

次に、項目1 “私はすべての点で自分に満足している”の向上心群において、「まったくあてはまらない」を選んだ群と、「あてはまらない」を選んだ群で、平均値の差の検定を行った。向上心群139名のうち「まったくあてはまらない」と回答した者は42名で、自尊心得点の平均得点は23.21点 (SD=3.89) であり、「あてはまらない」と回答した者は97名で、自尊心の平均得点は25.53点 (SD=3.56) であった。t検定の結果、両者の平均得点の間には有意差が確認され（両側検定： $t(137) = 3.42, p < .001$ ）、「あてはまらない」と回答した群の方が、平均得点が高いという結果が示された。

項目8 “もう少し自分を尊敬できたならばと思う”の向上心群において、「よくあてはまる」を選んだ群と、「あてはまる」を選んだ群で、平均値の差の検定を行った。項目8での向上心群81名のうち、「よくあてはまる」と回答した者は17名で、自尊心の平均得点は24.47点 (SD=3.90) であり、「あてはまる」と回答した者は64名で、自尊心の平均得点は25.53点 (SD=3.76) であった。t検定の結果、

両者の平均得点の間には有意差は確認されなかった（両側検定： $t(79) = 1.03, n.s.$ ）。

考 察

結果より、項目1「私はすべての点で自分に満足している」と項目8「もう少し自分を尊敬できたならばと思う」と共に、自己嫌悪群と向上心群との平均得点の間に有意差が確認された。この結果から、自己評価低群の中に、異質な要因として「向上心群」が含まれている可能性が示唆された。従来の自尊心尺度での採点では、4段階評定法、あるいは5段階評定法で採点に従って単純に合計点が算出されていた。しかし、自尊心得点の低群より、「向上心群」が異質な集団として抽出される可能性が示されたことにより、自尊心尺度項目の再検討、あるいは新たな自尊心尺度の開発が求められる可能性がでてきた。従来からの欧米（特に北米）と日本人を対象にした自尊心得点の比較では、日本人の自尊心や自己評価が低いことが再三、指摘されてきた（南, 1983, 1994；高田, 1993；松本, 1994）。このことは本研究の結果より再考の余地が含まれている可能性が指摘できるだろう。

次に、項目1での向上心群のうち「まったくあてはまらない」という選択肢を選んだ群と、「あてはまらない」という選択肢を選んだ群の平均得点の間には有意差が確認され、項目8での「よくあてはまる」を選んだ群と、「あてはまる」を選んだ群の平均得点の間には有意差は確認されなかった。この結果、項目1は、尺度上では向上心群もRosenbergの自尊心概念に沿ったものと言える。しかしながら、項目8では、Rosenbergの自尊心概念には十分沿ったものではない可能性も示された。項目8で有意差が確認されなかったというこ

とは、自尊心以外の影響が強く影響しているものと考えられる。自尊心以外の影響とは、第8項目に含まれるrespectの翻訳である「尊敬」という語の問題である。田中（1999, 2002c）は、これまで日本では、自分を尊敬することが、日本文化にそぐわないのではないかと指摘してきた。その理由の一つとして調査協力者が自尊心尺度に回答する際に、自分のことを大切、あるいは自分に自信があると感じつつも、自分を尊敬するという水準に満たないと感じ、「よくあてはまる」、「あてはまる」と回答している可能性があるからである。以上のことから、Rosenberg（1965）の自尊心尺度の定義は、「自己に対する肯定的、あるいは否定的な態度」であったが、上記の項目は、この定義を十分に満たしているとは言いがたい。

田中（1999）の研究からも、Rosenbergの邦訳版自尊心尺度には、調査協力者の回答理由を確認すると、「自己に対する肯定的、あるいは否定的な態度」以外の感情が影響していると思われる項目が確認されており、福井・高木（2004）の研究からも、これらの結果が支持されている。

近年、田中（2005b）は、「自己に対する肯定的、あるいは否定的な態度」を分類するための8項目からなる自己肯定感尺度を開発している。この尺度は、自分を尊敬する（respect）というような意味を含む項目は含まれてなく、自己に対する前向きな態度を測定する道具として、概ね実用可能な水準までの段階には達しているものと思われる。今後は、自己肯定感尺度に関する更なる検討と、新たな自尊心尺度の開発が求められる。

脚注

注1 本研究は、田中道弘 2004 自尊心測定を試み(3)榎本博明・小林亮(企画)日本社会心理学会第45回大会ワークショップ8 自尊心尺度開発の試み(3)において、指定討論者(菅原健介氏:聖心女子大学教授)に指摘された内容を分析したものである。

注2 項目の並びは星野(1970)の順に従っている。

注3 田中2002bでは、全肯定回答群(自己評価高群)、全否定回答群(自己評価低群)向上心群の3群に分類している。このうち向上心群は、全否定回答群(自己評価低群)の中に含まれるが表現に問題があった。そこで、表現を、自己評価低群の中に“自己嫌悪群(全否定回答群)”と“向上心群”の2群が含まれていると修正する。そして分析は、自己評価高群と自己嫌悪群、向上心群の3群で行う。

文献

福井齊・高木修 2004 自尊感情尺度で測定された低自尊感情:特性的自己効力感尺度、コーピング尺度との関連における検討 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 328-329.

星野命 1970 感情の心理と教育(二)児童心理, 24, 1445-1477.

松本洗 1994 大学生の自己意識における比較文化的研究:とくに自己意識構造の比較について 日本大学芸術学部紀要, 24, 72-83.

南博 1983 日本の自我 岩波書店

南博 1994 日本人論:明治から今日まで 岩波書店

溝上慎一 1997 自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係:個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係 教育心理学研究, 45, 62-70.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.

高田利武 1993 青少年の自己概念形成と社会的比較:日本人大学生にみられる特徴 心理学研究, 41, 339-348.

田中道弘 1999 Rosenbergの自尊心尺度に対する回答理由の研究 日本青年心理学会第7回大会発表論文集, 29-30.

田中道弘 2000a 青年の向上心と時間的展望との関連について 日本青年心理学会第8回大会発表論文集, 28-29.

田中道弘 2000b 自己肯定感尺度項目の検討 日本応用心理学会第67回大会発表論文集, 57.

田中道弘 2001 自己肯定感尺度(Self-positivity scale)項目の検討(2)日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 239.

田中道弘 2002a 青年の向上心と時間的展望との関連について(2)日本心理学会第66回大会発表論文集, 43.

田中道弘 2002b 自尊感情の測定に関する視点から(2)林洋一・榎本博明(企画)日本社会心理学会第43回大会自主企画 自尊感情をめぐって(2)日本社会心理学会第43回大会論文集, 878-879.

田中道弘 2002c 文化と自己 梶田淑一(編)自己意識研究の現在(初版第2刷)ナカニシヤ出版 Pp.171-188.

田中道弘 2004 自尊感情測定を試み(3)榎本博明・小林亮(企画)ワークショップ8 自尊感情尺度開発の試み(3)日本社会心理学会第45回大会 配布資料(未公刊).

田中道弘 2005a 青年の精神的健康感を捉える指標の検討:自己肯定感と時間的展望の視点から自己心理学(日本心理学会自己心理学研究会・日本発達心理学会自己心理学研究会分科会), 2, 26-34.

田中道弘 2005b 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論究, 13, 15-27.